

思ひ草

第14号

平成26(2014)年7月23日 発行

「脱皮」を促す褒め言葉～「頑張ることを応援」～

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



田植えが始まると、今でも地方によっては、「しつけ時」と言います。田植えとは、「しつけ」のことです。この時期、多くの子どもたちにとって、まさに「しつけ時」。子どもにとって、1年の内でも転換期、言い換えれば「脱皮」の時です。

子どもたちの「脱皮」の機会、意外と小さなところにあるものです。先日、都内の小学4年の学級会の研究授業に参加し、一人の子ども「脱皮」に立ち会うことができました。

学級会のテーマは、「思い出残しをしよう」。話合いの結果、「自慢大会」に決まりました。その時です。一人の子どもが意見を言いました。「でもね、自慢大会で失敗すると、恥をかくよ。そうしたら、思い出したく無い自慢大会になるよ」。

この発言が、話合いの新しい流れをつくりました。最終的に、「クラスの決まりをつくる」という事項が加わりました。クラスの新しい決まりは、二つ。一つは、「今後、友だちが失敗しても絶対笑わない」。もう一つは、「クラスのみんなで、自慢大会の練習のお手伝いする」、です。彼は嘗て、縄跳び大会で失

敗をし、ばつが悪かったという苦い体験をもっていました。

担任教師は、学級会の終末部の「今日のポイント」で、今回の話合いの鍵となった彼の発言をすかさず取り上げました。

実は、彼はクラスの中で、教師仲間と言う「気になる子」、いわゆる「問題を持つ子」の一人でした。

この子なりの成長への「脱皮」に気づいたのは、授業後の研修会の最中でした。彼はその部屋の前を何度もうろつくの。担任教師が呼び止めると、彼は「忘れ物をした」。先生は、「それなら勝手に持って帰ればよい」などとは言いません。頭を撫でながら、今日の彼の活躍を、改めて褒めてやりました。彼は大喜びで、スキップを踏みながら教室に跳んで行きました。

先生方の顔は、どれも微笑みで一杯になりました。小さな「脱皮」の瞬間に遭遇したのです。教師は誰も、子どもたちが豊かな「脱皮」体験をしてくれることを祈ります。そして、何よりも子どもたちの『頑張ることを応援する』喜びを感じます。

学びや育ちをつなぐ

人間開発学部教授 かみなが みつこ 神長 美津子



今年度の夏季教育講座のテーマは、「学びと育ちをつなぐ『幼保小の連携』」です。幼稚園や保育所、小学校の現職の方々を対象にして、幼保小の連携に取り組んでいらっしゃる方々に話題提供していただき、いかにして幼児期の教育から小学校教育に学びや育ちをつないでいくかを考えたいと思います。

学校教育においては、「幼小の連携は、常に古くて新しい課題である」と言われています。いつの時代においても、遊びを中心とする幼児期の教育と、教科等の学習である小学校教育との間にある段差が問題となり、それをどうするかが課題となってきたのです。もうすでに30年弱前になりますが、平成元年小学校学習指導要領における生活科設置は、そのための大きなカリキュラム改革でした。小学校入学により、いきなり教科の学習が始まるのではなく、幼児期の「興味や関心に沿った活動」から、生活科の「興味や関心を生かした学び」への移行を確保して、幼小間にある段差を低くしたのです。

現在、各地域で進められている幼保小の連携の背景の一つには、家庭や地域生活の変化による子どもたちの体験不足や、そのために生じている発達の問題があると言われてい

ます。小の連携を密にして、今まさに子どもたちの中に育とうとしていることを共有し支えていくことが求められているのです。

ある5歳児保育の場面での子ども同士のいざこざにさりげなくかかわる保育者の言葉かけが印象的でした。相手の非を訴える子どもに対し、『わざとじゃない』のはわかっているんだ。『わざとじゃない』けど、謝ってほしいよね」と、「わざとじゃない」を強調してゆっくりと話していました。それは、当事者の二人が高鳴る気持ちを抑えて、「考える時間」をとる援助でもありました。さりげない言葉かけでしたが、二人の対決した気持ちに確実に変化をもたらしています。

「学びや育ちをつなぐ」ということは、何か特別な場面で特別なことをして「つなぐ」ことではないと思います。子どもたちの中に今まさに育とうとすることについて、関係者間で確認して共有し、子どもの学びや育ちを「支えていく」ことではないでしょうか。

この意味で、今回の研修会が、幼保小の連携に関わる方々が集い合い、互いの子どもの見方や考え方を交流する場となり、実り多いものとなることを願っています。

教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。

教育実習 学校現場での実習から多くのことを学びました

教育実習から学ぶもの

人間開発学部 教授 猿田 祐嗣

平成26年度前期の教育実習もほぼ終了に向かいつつあります。教育実習を終えた学生は達成感・充実感とともに、新たな課題や不安を抱えていることでしょう。「あっという間に終わってしまった」、「あれだけ準備したのに、うまくいかなかった」など、さまざまな感想や反省を胸に抱いて、また大学で学生としての普通の生活に戻りつつあるところではないでしょうか。

教育実習期間は、それまでの学生生活と異なり、非日常の時間・空間を過ごすことになります。また、学生という受け身の立場から実習教諭という能動的に振る舞わねばならない立ち位置を意識せざるを得ません。学校や教室という空間の中で、自分が発する言葉や指示に従って児童・生徒の勉強や活動が始まったり終わったりするという時間の管理者としての経験も初めてだろうと思います。さらには、教え込むのではなく、児童・生徒の学びの支援者としての役割も必要となると、少くも教育実習を経験したからといって一筋縄でいくものではありません。

それではどうしたらいいの、と途方にくれてしまうかもしれません。しかし実は、教師自らも教えるだけでなく、教員生活を通して常に学び続ける立場にあり、学び続けることによって教師としての指導力も日々向上していくのです。

教育実習では校長先生をはじめ教職員の方々の励ましや指導があったことと思います。それらはすべて、教員を目指す意志を表明して学校現場に飛び込んだ実習生を仲間として認識してくれた証です。将来を期待してくれているからこそ、暖かい言葉だけでなく厳しい叱責や励ましの言葉もかけてもらえるのです。不十分だったところや反省すべきところを克服するために、教育実習後の大学での学びをしっかりとやりなさい、というメッセージが込められているのです。大学の教職員も教育実習校からいただく熱い期待に応えるべく、これからも学生の支援を続けたいと思っています。初志貫徹の精神で教員を目指して頑張りましょう。

教育実習 ～一人ひとりに対する支援の大切さ～

初等教育学科 3年 蘆澤 千帆

私は、母校の小学校で教育実習を行った。担当は3年生でとても充実した実習を送ることができた。教育実習を通して多くの大切なことを学ぶことができたが、なかでも子ども一人ひとりに対して支援するということの大切さを学んだ。

子ども一人ひとりに対する支援の大切さは、研究授業の体育授業を通して学ぶことができた。マット運動で前転を行ったが、一人ひとりの実力が異なり、後頭部で回ることができない子や、あとは膝を閉じることができれば完璧という子など、さまざまであった。担任の先生と相談して、授業では自分の課題について友達同士判断させ、それぞれに合った練習方法を示した。後頭部で回ることが出来ない子には「おへそを見るように」、膝が開いてしまう子には「帽子を挟んで回るように」等、アドバイスをした。

子どもたちが自分の課題について理解できるように適した練習方法を示すことで、自分が何をすべきか目的をもって取り組むことができるようになった。また、ひたすら前転させるのではなく、様々な方法を示すことで、子どもたちも楽しく取り組むことができていたと感じた。子どもたち自身がやるべきことを理解して活動することは非常に重要であり、それらをよりよくするために教師の支援が必要なのだわかった。一人ひとりに合った支援やアドバイスをするために、教材研究を深くすることが大切であると実感した。教材研究を通して、一人ひとりの課題に適切にアドバイスをし、子どもたちができるようになるために繰り返しの支援が重要だと思った。

教育実習の4週間はあっという間に過ぎてしまった。それは毎日が楽しく充実していたからだと思う。子どもたちと実際にかかわり教師という仕事を間近で見ることで、教師になりたいという気持ちがよりいっそう大きくなったと思う。遅くまで残って指導してくださった先生方や、子どもたちに支えられて教育実習を終えることが出来たという感謝の気持ちを忘れずに、勉強に励んでいきたい。

教育インターンシップ

今年も「実践体験型実習」をテーマに学びます

今年度から子ども支援学科の2年生の教育インターンシップが始まりました。平成26年度は、初等教育学科82名、健康体育学科38名、子ども支援学科85名の学生が、地域教育機関での実践体験型の実習を通して学びを深めています。

教育インターンシップを経験して

子ども支援学科 2年 伊藤 千晶

今回、私が教育インターンシップで学んだことの中で、特にこれからの課題にしていきたいと思う点が二つある。

一つ目は「子どもの目線に立つ」ということである。子どもと接していて、子どもの目線というものに気を付けていても、つい自分が基準になってしまうことが多々あった。たとえば、子どもに伝わりにくい抽象的な言葉を使ったり、子どもの背丈に合った物の配置ができていなかったりと、大人の視点で子どもと接してしまい、子どもたちを困惑させてしまった場面がいくつかあった。子どもの目線に立つということは、常に周りに目を配ることが必要なので、その大変さを知ることができた。

二つ目は「援助するかどうかを見極める」ということである。子どもが遊んでいて、「危ないからやめようね」と遠ざけることが、逆に遊びを妨げていないかと思うことや、子ども同士が言い争い、なかなか遊びが始まらないとき、子どもたちの意見を聞くことに集中して全く遊びが進展しないということがあった。ここから先は危険という境界線や、ここからは先生が決めなければ先に進めないという境界線を見極めることはとても難しいことだと思った。他にも、子どもの年齢や個人によって、達成してほしい目標をつくり、スモールステップ方式をとるときも、そのステップの定め方について同じことが言えると思った。

私は今回、改めて子どもの力を甘く見ていたと反省したことがたくさんあった。子どもは大人が思いもつかないような方法で人間関係を築き、声掛けひとつで予想以上の力を発揮することもある。「子どもだからできない、できないから援助してあげる」という考え方では子どもの成長の幅を限定してしまうと感じた。一人一人の子どもの素敵なおところを見つけて伸ばすことができるような保育者になるために、その子がどうしたら成長できるか、子どもとの関わり方をもっと深く考える必要があると思った。

教育インターンシップについて

子ども支援学科 2年 野上 紗希

私は園での子ども達の1日の流れをつかむために1日8時間の教育インターンシップを計5回行い、また、先生方のご厚意により5回全て異なるクラスを担当させて頂き、年少・年中・年長の全学年の子ども達と触れ合うことができた。

私は教育インターンシップで、「子どもの目線に立つ」ことの大切さを学んだ。片付けの際に、まだ、遊びたがっていた子どもに「今はお片付けの時間だからもうおしまだよ。」と言ったら、怒って部屋から出て行ってしまったという出来事があった。そのことから、まだ遊びたいという気持ちに寄り添った言葉がけをすべきだったと反省した。また、年中児と砂遊びをすることになったのだが、砂場には既に山が作られていた。これをどうするのかと思い子どもたちの様子を見てみると、泥団子作りから得た「白い砂をかけると固まる」という経験をこの遊びに応用して山を修復し始めた。もともとあったものを上手く利用しながら遊べることと他の遊びから得た知識を活かしていたことに感心した。この幼稚園では子ども達は自由遊びの際は学年の隔てなく遊んでいたため、遊びの途中で年長児が加わり、年中児に了承を得てから山の頂上より水を流し始めた。年長児が加わったことで遊びが発展した。年少、年中児は年長児と遊ぶことにより、自分の中になかった発想を取り入れて学んでいくのだと思う。

実際に現場に出て子ども達と触れ合うことで、座学では学べない実践的な部分や年少から年長へ上がっていく中での成長の過程を実感でき、それは私にとって貴重な経験となった。日々の積み重ねの中にはたくさんの保育者の思いや願いが込められており、また、様々な経験が子ども達にとって力となっているため、環境構成、保育者の言葉がけ、子ども達の様子などいろいろなところに目を向けながらたくさんの方の発見や気づきを深めていきたい。



未来塾

「人間開発は人づくり」をモットーに！

教育実践総合センターでは、学生の学びを応援するために、人間開発学部の先生方による自主講座『未来塾』を開講します。自分の課題に応じて講座を選択し、積極的に受講することができます。

講座名	担当	開講場所・開講期間
高山真琴先生の「ピアノ」講座 講座1 ピアノ講座 講座2 幼稚園実習対策ピアノ講座 講座3 教員採用試験対策ピアノ講座 講座4 保育士資格取得対策ピアノ講座 講座5 就職対策ピアノ講座	■一人一人の目的に合わせて講座が用意されています。 高山真琴 准教授	1号館ピアノレッスン室他 各目的終了期まで
上口孝文先生の 柔道基礎力養成講座	■柔道の段位の取得を目指す学生を対象に行います。 上口孝文 教授	体育館柔道場 4月12日～11月22日 毎週土曜日2限
原英喜先生の 講座1 泳げるようになろう講座 講座2 臨海学校見学と小遠泳体験講座	■教員採用試験対策、指導者としての基礎的な水泳能力向上を、という学生を対象に行います。 ■教育や指導の現場へ出るための実践力を要請します。 原 英喜 教授	横浜国際プール 他 6～10月 千葉南房総市、館山市 8月に1泊2日
石川清明先生の 子どもの遊び体験講座	■「子どもの遊び」に関心を向け体験することで、保育者を志す学生の資質向上をめざします。 石川清明 准教授	3号館3309研究室、5号館教室 5月～3月

平成26年度の予定をお知らせします

- 7月24日(木) 16:00～
第1回教育インターンシップ連絡協議会
- 8月30日(土)
國學院大學教育実践総合センター第6回夏季教育講座
「國學院大學幼保小の連携実践フォーラム」
- 10月26日(日) 13:00～
共育フェスティバル
- 12月
教育インターンシップ 報告会
第2回教育インターンシップ連絡協議会

「学びと育ちをつなぐ『幼保小連携』をテーマに、「國學院大學幼保小の連携実践フォーラム」を行います。

